

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： グローバルセンター/特任講師

氏 名： 福富 渉

授業科目名	海外研修基礎コース in 東南アジア
研修先	シンガポール国立大学（シンガポール）
研修期間	令和2年2月15日 ～ 令和2年2月29日
[研修の目的・概要] 本研修には、法文学部、農学部、工学部から、1年生と2年生で合計15名の参加があった。（うち1名は本事業の支援対象外） 本研修の目的は、世界のビジネスハブであるシンガポールを訪れることで、グローバル都市国家の現状を目にし、同時に、その社会を構成する多民族状況や歴史状況を学ぶことで、ひとつの社会の成立について深く思索し、今後の大学での学びにおける新たなマインドセットを獲得することにある。本研修のプログラムを大別すると、以下のようになる。 (1) 語学研修 本研修の参加学生は、2月17日～21日の5日間、NYU Language Schoolで短期学習コース（Holiday Programme）を受講した。研修実施前のテスト結果にもとづき、習熟度別クラスに分かれて受講した。 (2) 現地大学生との交流 2月19日に、シンガポール国立大学（NUS）人文・社会科学部の言語学習センターで開講されている日本語5のクラス（森田和子教員）との交流会を実施した。鹿児島大学からは15名の学生が、NUSからは50名の学生が参加した。 (3) 現地企業訪問 2月26日に五洋建設株式会社（Penta-Ocean Construction）のシンガポール営業所を訪問し、鹿児島大学工学部OBで、シンガポール営業所所長の山下一志様と同社国際部門国際土木本部の丸野大輔様からお話を伺った。 (4) 多民族社会・歴史・芸術関連フィールドワーク 事前学習において定めた学習テーマを反映させつつ、シンガポールという国家の多文化状況や、第二次世界大戦期の戦跡をめぐるフィールドワークを実施した。また、いくつかの美術館やギャラリーを訪れ、アーティストへのインタビューもおこなった。	
[研修の成果] *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。 ・事前学習 本研修では、4時間×3回の事前学習を実施した。あらかじめ配布した資料を講読した上での発表、太平洋戦争に関するドキュメンタリーの視聴、語学学校のクラス分けテスト、シンガポール国立大学との交流会におけるプレゼンテーションのアウトライン検討会などをおこなった。海外研修では、参加者同士が自由に意見を交換する環境をセッティングすることが肝要となる。事前学習から、体験→共有、というフローをくりかえした結果、研修開始後も、日々の意見共有・議論などが活発におこなわれた。 ・研修内容について 上記概要で記した四項目について、成果を記載する。 (1) 語学研修 わずか5日間の英語クラスの受講だったが、学生たちそれぞれが、自らの英語能力の至らなさを感じ、帰国後の学習への意欲を新たにしていた。各クラスには、シンガポールへ語学留学に訪れている他国の学生が在籍していた。今後の世界において、非ネイティブの英語話者とコミュニケーションする機会は、ネイティブの話者とのそれよりも多く訪れる可能性がある。学生たちの中にそういった認識を育むという意味でも効果的な在籍だった。 プログラムの一貫で、シンガポール東北部にあるウビン島へのフィールド・トリップが実施された。日本では目にすることのない熱帯雨林気候の自然と向き合った学生たちは、興奮を隠さずにいた。また同島では、政府主導によるマイクログリッド（小規模地域送電網）の実験が進んでいる。環境とテクノロジーの共存という観点からも、学生たちにとっての大きな学びとなった。 (2) 現地大学生との交流 シンガポール国立大学の交流会でのプレゼンテーションでは、「社会的格差」「家族・ジェンダー」「外国人・多文化共生」「教育」「食」といったテーマを設定した。単なる事実の提示ではなく、データを使用した問題提起と解決法の提案を双方に求めた結果、学生同士の議論も白熱した。NUSの学生の学習に対する意欲や意志の明確さ、強さに驚きを感じ、自身の姿勢を省みたようだ。 鹿児島大学の学生たちは、国策的に投資がなされているNUSの教育環境・設備の潤沢さを目にしてショックを受けていた。NUSは、英THEによる世界大学ランキングではアジア2位（2019年）を記録しており、その資金力や国際性が高い評価を受けている（鹿児島大学は301-350位）。同じ国立の大学で学ぶ学生として、自国の状況について思うところがあったようだ。	

(3) 現地企業訪問

1965年のシンガポール営業所開設以降のプロジェクトについて、丸野さま、山下さまより詳細な説明をいただいた。その中で直面してきた苦労や問題などを共有していただき、学生たちは「海外で働く」ということの具体的な例を知ることができた。学生たち全員からの質問にも詳細に答えていただき、単にシンガポールで働く、海外で働くというだけでなく、労働環境、女性の働きやすさ、多民族環境におけるマネジメント、環境対策など、国際的な組織に属して働くということを総合的に考察する機会となった。

(4) 多民族社会・歴史・芸術関連フィールドワーク

多民族社会の観点からは、アラブストリート、リトル・インディア、シンガポール国立博物館などを訪れた。歴史の観点からは、日本占領時期死難人民記念碑、旧フォード工場博物館、クランジ戦没者墓地などを訪れた。芸術の観点からは、国際芸術展シンガポール・ビエンナーレを鑑賞し、現地に滞在制作中のタイ人アーティスト、ブラバット・チワランサンにインタビューをおこなった。

シンガポール建国の歴史と並行してその多民族状況について学習することで、発展した都市国家というだけでなく、明確に区分された社会階層や、文化的衝突や社会問題を内包した国家としてシンガポールをとらえることができるようになった。

多くの戦跡を周り、大戦時の歴史について学習したことは、本質的な学びの価値というものを認識する体験になったようだ。日本の占領下にあったシンガポールにおいては、戦時中の歴史記述の中で、日本が加害国として描かれている。学生たちもの多くは、被害国としての日本のイメージを強くもっており、その差異にショックを受けたようだ。

ほとんどの学生にとって、現代アートの鑑賞ははじめての体験であった。だが、鑑賞を続ける中でさまざまな社会的論点の存在を認識し、それを表現するという方法が世の中にある、ということを知っていた。また、インタビューをしたブラバット・チワランサンは、シンガポールや日本などで不当に搾取される移民労働者についてのドキュメンタリー作品を制作している作家で、自身の住む国にすら同様の社会的論点が存在するという事に気付かされた学生たちは、大いに刺激を受けていた。

・地域のグローバル化・活性化に資する人材育成について

英語を公用語とする多民族・多文化社会で、さまざまな社会問題を内包するシンガポールで過ごし、さらに今回の新型コロナウイルスの感染拡大に関する世界各国の対応状況を見るうちに、世界が均質化していくという意味での「グローバルバリエーション」の限界が、学生内で共有されるようになった。単にフラット化する世界を英語でつなぐ、という単純な思考ではなく、ローカルとローカルを、それぞれの特性を生かした形で接続し、そこを橋渡すような人材が、今後ますます必要とされる。そういった自覚を学生たちが得たことは、鹿児島という地域のグローバル化・活性化に大いに資することになるだろう。

[今後の課題]

参加学生の多くが、本研修をきわめて有意義な体験だったと回顧している。ほとんどの参加者が1年生であり、海外経験のない学生も多く、海外で目的を決めて移動する、人々と外国語でコミュニケーションをとって問題を解決するという基本的な部分が、一つ一つのハードルとなったようだ。研修の全日程において、各日の経験をメモする担当者を決めた上で、夜にはその日の発見と学びを共有し、議論する、ふりかえりの時間を設けた。これらの日々の課題の効果について好意的に述べていた学生がほとんどで、次年度以降も同様の方法を継続したい。

引率教員は、昨年続いて3度目のシンガポール研修企画担当となった。しかし研修実施前に、新型コロナウイルスの感染拡大に関する対応策の協議や、その他の通常業務から疲労が蓄積し、体調を崩した。研修中の3日間はホテルで休養することとなってしまい、学生たちには大いに迷惑をかけた（各訪問先は、もうひとりの引率職員が引率した）。例年は学生の体調管理についての反省点がいくつかあったが、引率教員自身の体調管理も、十分に気をつける必要がある。

今年度は、前年度から、プログラムのさらなる充実を図った。いっぽう、教員が望む方向に学生の思考を誘導することなく、どのように学生たち自身が感受性や想像力を働かせられるようにするか、どのようにオープンな議論を許容する空間・時間を用意し、そこに参加してもらうか、研修実施のたびに熟慮が必要であることがわかった。